

河合塾・第3回全統マーク模試にみる2020年度入試の動向 ②

【私立大学編】

●早稲田大学

大学全体の志望者数は50,091人（前年比93%）と減少した。方式別にみても、一般方式で41,173人（前年比93%）、センター方式で8,918人（同91%）といずれも減少した。2019年度入試では合格者数の大幅な減少はみられなかったものの、引き続き敬遠される動きがみられる。一般方式では、法学部（前年比91%）、商学部（同88%）、国際教養学部（同90%）、人間科学部（同89%）で志望者の減少率が高い。理工3学部では、基幹理工学部（前年比98%）、創造理工学部（同90%）、先進理工学部（同97%）と3学部とも前年を下回った。土木環境系の創造理工学部（建築、総合機械工）で志望者の減少率が高い一方、先進理工学部（化学・生命化学、生命医科学）で志望者が増加した。なお、基幹理工学部の機械科学・航空学科は2020年度から機械科学・航空宇宙学科に名称変更する。この学科が含まれる学系Ⅱの志望者は前年比102%と、今のところ大きな影響はみられない。センター方式では志望者が前年から1割以上減少した方式が多くみられる。なかでも政治経済学部（前年比90%）、商学部（同84%）といった社会科学系の学部での減少率が高い。ただし、成績上位層は前年に比べ増加しているため注意が必要だ。また、2019年度入試で前年の1.5倍近い志願者が集まった商学部でも前年比84%と志望者は大きく減少、警戒されている様子がうかがえる。

●慶應義塾大学

大学全体の志望者は前年比89%と減少した。早稲田大、上智大も志望者が減少しており、2019年度入試でみられた難関大を敬遠する動きは続いている。学部別の動向をみていくと、法、経済、商学部など多くの学部で志望者が前年から1割以上減少した。医療系では、医学部の志望者は前年比104%と増加したが、薬学部では同92%と減少した。薬学部では2019年度入試まで5年連続の志願者減となっているが、今模試でもその反動はみられない。理工学部では変更が2点ある。1つめは電子工学科の名称変更で、2020年度から電気情報工学科となる。2つめは学門の構成の変更で、2019年度までは学門1～5と称していたが、2020年度からは学門A～Eとなり、進級できる学科構成も変更される。理工学部全体の志望者数は前年比89%と減少した。学門ごとでみると、進級先が機械工、電気情報工、物理情報工、情報工などとなっている学門A・Bに志望者が集まり、志望者／募集人員の倍率も理工学部全体で6.9倍に対し、学門Aで11.9倍、学門Bで8.0倍と人気となった。

●上智大学

大学全体の志望者数は16,051人（前年比98%）とほぼ前年並みとなった。方式別では、学科別で前年比97%、TEAP利用型で同102%と学科別方式で志望者が減少した。2019年度入試では、志願者数が約1割の減少となったが、合格者数も減少したため、難化した学科が目立った。今回模試の志望者数を学部別にみると、理工学部（前年比108%）で増加しているものの、外国語学部（同90%）、法学部（同90%）では1割程度減少した。法学部では国際関係法—TEAP利用型、地球環境法—学科別で、それぞれ2019年度入試より1ランクダウンの0ランク（偏差値67.5）、1ランク（偏差値65.0）を予想している。理工学部では、情報理工—学科別の志望者が前年比118%と増加しており、現段階でランクアップは予想していないが、成績上位層の増加もみられ、今後の動向に注意が必要である。2021年度入試から共通テストを利用するなど、入試改革を予定、それを控えた2020年度入試は大きな変更はない。

●東京理科大学

大学全体の志望者数は24,143人（前年比98%）と概ね前年並みである。早稲田大、慶應義塾大、上智大やMARCHなど首都圏の難関私立大の中では、減少幅は小さい。方式別にみると一般方式で13,012人（前年比102%）と前年を上回る一方で、センター方式では11,131人（同93%）と減少したことが大学全体の志望者数減に影響している。一般方式では、B方式で前年比102%、グローバル方式で同106%といずれも前年を上回るが、センター方式では、A方式で前年比94%、C方式（センター併用型）で同88%と、対照的な動きとなった。学部学科別の状況をみると情報系学科の人气が高く、B方式で工（情報工）が前年比120%、理工（情報科学）が同114%など志望者の増加が目立つ。また、理工（情報科学—グローバル方式）は2019年度入試で難化したのが、2020年度入試ではさらに難化を予想しており、ボーダーランクは3ランク（偏差値60.0）を見込んでいる。経営学部では、全体の志望者は減少したものの、ビジネスエコンミクス学科はすべての方式で志望者は増加、B方式では前年比132%、ボーダーランクは2019年度入試から1ランクアップの2ランク（偏差値62.5）を見込んでいる。

●明治大学

大学全体の志望者は前年比96%となっており、2019年度入試で前年比93%と志願者が減少した反動による増加は、今回模試の動向からは見られない。方式別にみても、一般方式は前年比97%、センター利用方式では同92%と両方式で減少をした。学部別・方式別にみると、商学部では2019年度入試で難化した影響から、前回模試での志望者減少に続き今回の模試でも減少、前年比90%となった。また、同じく志願者が増加して実質倍率が上がった農—農の全学部統一入試（3科目方式）でも志望者が197人（前年比53%）と大幅に減少した。成績上位層も前年比36%と減少したことから、ボーダーランクは1ランクダウンの2ランク（偏差値62.5）を予想している。2020年度入試より新規実施される国際日本学部の一般選抜入試（英語4技能試験活用方式）と全学部統一入試（英語4技能3科目方式）、農学部の全学部統一入試（英語4技能3科目方式）では、前回の模試と同様に今回の模試でも志望者は集まっておらず、まだ認知が広まっていない様子がみられる。ただし今後の認知の拡大も予想され、国際日本学部の一般選抜入試（英語4技能試験活用方式）を除き、ボーダーランクは既存の方式と同ランクを予想している。

●青山学院大学

大学全体の志望者数は前年比94%と減少した。方式別にみても、一般方式で前年比97%、センター方式で同85%といずれも志望者が減少した。学部別にみると、志望者減となった学部が目立つ。とくに、法、国際政治経済学部の2学部では、前年から1割以上減少しており、他学部と比べても減少率が高い。ただし、成績上位層に大きな変化はなく、ボーダーランクは概ね2019年度入試並みと予想している。一方、理工学部では志望者が前年比102%と前年を上回った。学科別に見ると、化学・生命科学の個別学部A方式（前年比109%）、B方式（同121%）で志望者が増加、それぞれ1ランクアップを予想している。また、情報テクノロジー学科では志望者は前年比106%と増加しており、情報系の人気を裏付ける動きとなっている。経営学部では、2020年度入試より個別学部C方式が廃止となるが、募集人員・志願者数ともに少ない募集区分であったため、全体動向への影響はみられない。

●立教大学

大学全体の志望者数は、前年比92%と減少した。方式別でみても、一般方式で同94%、センター方式で同87%といずれも減少した。減少の大きいセンター方式では、3科目型で志望者は減少しているものの、6科目型では増加しており、国公立大との併願を見据えた志望の増加が要因と考えられる。学部別にみると、理学部を除く学部では志望者が軒並み減少した。とりわけ、コミュニティ福祉学部（前年比76%）のほか、異文化コミュニケーション、観光、法学部（それぞれ同88%）では高い減少率となった。多くの学部で志望者が減少したことにより、ボーダーランクがダウンする区分が散見される。とくに全学部日程グローバル方式では複数の学部学科でダウンが目立ち、現代心理—映像身体、

社会—現代文化、コミュニティ福祉—コミュニティ政策では2ランクダウンを見込んでいる。

●中央大学

大学全体の志望者は前年比96%と減少した。方式別では、一般方式で前年比98%、センター方式で同92%と全国動向同様、センター方式での減少が大きい。学部別では、志望者が前年を上回ったのは文学部の一般方式（前年比100%）とセンター方式（同101%）、理工学部の一般方式（同103%）のみ。その他、一般方式で例年志望者が多い法学部、経済学部、商学部では前年比98%と前年並みであった。新設2年目となる国際経営学部、国際情報学部の志望者は減少、とくに国際経営学部は一般方式前年比77%、センター方式同79%と大幅に減少した。昨年の第3回全統マーク模試時では、認知度の高まりに加え、一般方式ではどちらも2教科受験（英語と現代文）で負担が少ないこともあり、多くの志望者を集めていた。しかし今年度の模試では、経済学部や総合政策学部を上回る予想ボーダー（偏差値62.5）となっていることも敬遠の一因と考えられる。例年志望者が多い学部については言うまでもなく、新設2年目の国際経営学部、国際情報学部や受験科目数が少ない総合政策学部の動向についても注意が必要である。また、総合政策、商、理工、国際経営、国際情報学部のセンター併用方式の出願締切日が、2020年度入試からセンター試験後となる。センター試験の結果を受けて出願することができるようになるため、昨年度までと動向が大きく変わる可能性がある。こちらにも注意したい。

●法政大学

大学全体の志望者は前年比91%と1割近く減少した。方式別にみると、一般方式で前年比94%、センター方式で同82%と、センター方式で大きく減少した。学部別にみても、志望者が減少した学部が多くみられた。前回の模試では経営学部の志望者減少が目立っていたが、今回も経営学部全体で前年比84%と減少が目立った。また、経営—経営戦略のセンター方式では、志望者前年比がB方式で前年比91%、C方式で同75%と減少しており、ボーダー得点率もB方式、C方式ともにダウンを予想し、易化を見込んでいる。このほか、前回の模試で志望者が増加した現代福祉、国際文化学部なども志望者は減少した。理工学部では志望者前年比99%と前年並みとなったが、成績上位層は一般方式、センター方式ともにやや増加した。